



独立性が剥奪される

— 次期FRB議長就任の意味 —

金融アナリスト
永山卓矢

【金融政策の素人のFRB議長が誕生へ】

トランプ米大統領は2日、次期FRB議長にパウエル理事の昇格を決めた。最終的にタカ派とされるテイラー・スタンフォード大学教授、イエレン現議長の3人に絞られ、その中から同理事が選ばれたとされている。

ただし、このパウエル理事はハト派的とされているが、ウォール街出身とはいえ本職は法律家であり、本当は金融政策については「素人」同然。これまで、FRB議長にはエコノミスト系が就任する事が多く、法律家が就くのは稀有なケースだ。

FRBには銀行の行動を監視し、規制をかけるといった仕事もあり、パウエル理事はそうした分野の専門家だ。しかし、基軸通貨国の中央銀行としてのFRBの政策で最も重要なのが金融政策なのだから、歴代のFRB議長には圧倒的にエコノミスト系が多いのは当然である。

これまでパウエル理事は、時折り金融政策姿勢や経済情勢について発言する事もあったが、それは単にフィッシャー副議長(当時)が主導権を握っていたFRB執行部の意向に迎合していたに過ぎない。同理事はハト派的とされているが、本当は金融政策についてはよく理解していない節がある。実際、自らの主義、主張を前面に出す事なく、単に展開の主導権を握っている執行部や主流派、権力者層の意向に忠実に従って発言し行動していたような気がしてならない。

もっとも、だとすればトランプ政権の意向に沿った金融政策運営が展開されやすくなるので、ハト派的という評価は的を射ている事になる。ただし、それは中央銀行の政治からの独立性が脅かされる事を意味する。まさに70年代に政権側の「イエスマン」になってしまい、「FRB史上最も無能な議長」との烙印を押された当時のバーンズ議長の二の舞を演じる事になりかねない。

そのあたりは、米権力者層が共和党系新保守主義(ネオコン)派を後押しし、トランプ政権に中国を敵視して「新冷戦」構造を構築させようとしている中で、国防費を大幅に増額していくにあたり、その円滑なファイナンスを必要としている事情がある。

そこで最も重要なのが、忠実な「属国」にして群を抜く世界最大の貯蓄超過国である日本からの潤沢な資金流入を維持する事であり、トランプ大統領が安倍首相と“ゴルフ懇親会”を開催した大きな一因がそこにある。

ただ米国側でも、日本側が大増発されていく米国債を引き受けなければファイナンスに支障を来さなくても、対外的な公的債務残高が積み上がってしまう。そこでそれを実質的に軽減させるために、ドル不安・危機を引き起こさない程度に緩やかにドル安誘導をしていく事が必要になる。そのため、政府が中央銀行であるFRBとの間で「政策合意(アコード)」を結ぶ事が、よりはっきり言えば、FRBを従属させる事が必要になってきた訳だ。

米ロックフェラー財閥の意向を受けて主要国・地域の中央銀行の金融政策を実質的に統轄、管理しているグループ・オブ・サートィ(G30)の幹部としてFRB執行部に派遣されてその主導権を握り、金融政策の正常化路線を推進していたフィッシャー前副議長が退任する事になった根本的な理由がそこにある。FRBで3番目の地位にあるNY連銀のダドリー総裁が来年半ばに退任すると表明したのも、基本的には同じ理由によるものだ。

【テイラー教授が再浮上したワケ】

ところで、今回の次期FRB議長の決定を巡り、一旦有力候補から外れたにもかかわらず、何故最終選考になって再びテイラー教授が浮上したのかについて触れておく。同教授は、政策金利の適正値をインフレ率や実質GDP成長率といったマクロ経済変数を用いて算出する理論数式を構築した事で知られている。

このモデルに従えば、現在の米国では政策金利であるFF金利を3%程度にまで引き上げる必要があり、それゆえに同教授はタカ派的とされているものだ。

このテイラー教授は00年代前半に財務次官に就任していた時から共和党員とされ、それゆえに今回、次期FRB議長の人事を巡り有力候補に挙げられた。しかし、本当はその経済理論はフィッシャー前副議長と同じ新ケインズ主義であり、共和党系ネオコン派の理念に通じ、表向き市場重視の姿勢を標榜している合理的期待形成学派と対立してきたものだ。

以前、同教授が次期FRB議長の有力候補とされたのは、フィッシャー前副議長の意向によるところが大きく、その前副議長の退任が決まるにつれて候補から外れていったものだ。

そのテイラー教授が土壇場になって最終候補に再浮上した背景としては、一般的な報道では、議会共和党では保守的な議員の間で健全財政や健全な金融政策、中央銀行の資産の健全性を求める風潮が強く、その意向を受けたペンス副大統領が教授を推していたという。ただし、副大統領は本当はカトリック教徒でありながら、キリスト教原理主義(エバンジェリカル)を介して共和党系ネオコン派とつながっているのだが、この時には盟友であるライアン下院議長の意向を受けて、議会の意向を代弁するために表向き教授を支持する姿勢を見せたと思われる。

これに対し、ムニューシン財務長官が金融市場に悪影響を与えないように、ハト派的なパウエル理事の昇格を推挙したとされている。しかし、それはあくまでも表面的な見方でしかない。

確かに、共和党保守派の議員はタカ派的な金融政策を好む傾向があるが、そうした一部の勢力がトランプ政権の政策立案や人事に大きな影響を及ぼしているとは思えない。

結論から先に言えば、テイラー教授を強力に推したのは、表向き共和党保守派の議員を押し立てながら、実際には欧州ロスチャイルド財閥だったようだ。そこに、中国やロシアに対する外交政策を巡り、キッシンジャー元国務長官を頂点とする国務省官僚群やCIAの勢力との提携関係が途切れた外交問題評議会(CFR)の勢力も同調していた可能性がある。

【欧米財閥の戦略の相違とFRBの金融政策】

この欧州系財閥は当初、中国の習近平国家主席が唱えている「一帯一路」構想に相乗りして巨大なユーラシア経済圏の構築を目指したが、中国が天文学的な債務を抱えている実態が明らかになるにつれて一旦それを諦めた。そこで中国に対して国際会計基準の導入や資本取引の自由化を受け入れさせ、国有銀行や代表的な国有企業を次々に買収していく路線に転じた。

そこでは、FRBが資産縮小や利上げを推進していく事で中国から米国に資金還流が進めば、欧州系財閥としては絶対的に有利な状況がもたらされる。中国では代表的な国有企業を含む多くの企業が莫大な対外債務を抱えている中で、人民元安が進むとその債務の実質的な返済負担が激増してしまい、バブル崩壊に拍車がかかるからだ。人民元に売り圧力が強まるたびに人民銀行が必死に買い支えてきたが、外貨準備が払底すると買い支える原資が枯渇してしまう。欧州系財閥としては、タカ派的なテイラー教授が次期FRB議長に就任するのが望ましい訳だ。

これに対し、米ロックフェラー財閥は中国でバブル崩壊が進み強権的な性格が強い習近平体制が動揺すると、「新冷戦」構造が構築できなくなるのでそうした状況になる事を望んでいない。

実際、フィッシャー副議長(当時)主導のFRBが利上げ推進路線を打ち出した事で信用不安が高まったのを受け、昨年2月26～27日に中国・上海で開催された主要20カ国・地域(G20)財務相・中央銀行総裁会議の際には、水面下で人民元安を防ぐために円高誘導をしていく事で合意されたものだ。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

テクニカル

急落は拌み取り

先週の日経平均株価も続伸、96年6月22,750の高値を更新、25年ぶりの高値23,382を付けた。ここで以前からの本欄の目標を達成した。前回のコメント「ざっくりと言えば、日経平均は92年2万円を割ってからここまで、ナベ底状態であったといえる。今この底値りから脱出しつつあり、これから、本格的な上昇が始まるといっても過言ではない」。前回は60年サイクルと8年サイクルについて述べたが、少なくとも8年サイクルの上昇期は2022年まで続く。先週次の通りコメント「少なくとも現行8年サイクルが強気型で推移するなら6～7年目(2022年)まで天井は到来しない。その間、最低でも62～76%戻しの26,000～31,000をトライしよう」。この目標値は控え目だが、今後到来する修正安で19000円台を維持するなら、現行8年サイクル内で史上最高値に挑戦しても驚くべきことではない。

現在は高値警戒感から急落を気にする向きもある。その可能性は否定できない。しかし高値から10%程度の下げに過ぎな

いだろう。来れば三段階で拾えるようにしておけばよい。ショック安が到来したとしても2万円前後は維持されよう。その意味では急落が入るたびに拌み取り。前回は述べた如く「長期上昇トレンドを視野に入れて日経E T F 現物(1570)を買っておくのが今の超低金利時代における勝利の方程式だ。目先はこれまで述べた如く20週移動平均が中期上昇トレンドをサポートする。今後、ショック安が入るたびに買って行くことだ」。



今週の押し

1.1750の壁

噂で買われ、事実で売られる。いや、噂で買われ、噂で売られる。米国の税制改革を巡るドル買い、爆騰した株式市場は、ここに来て利食いの大義名分を探している印象がある。

テクニカル及びサイクルの観点でも、そろそろ反転ポイントの時間帯に入っている。ただ、それが大きな節目なのか、小さな節目なのかは判然としない。代表例がユーロ/ドル相場だ。

この相場は9月8日の高値を頭、8月2日の高値を左肩、10月12日の高値を右肩に8月と10月の安値を結んだネックラインを割り込んで三尊天井が完成した。前週ブルバックポイントで反落した相場は、9月高値から9週目にあたる先週7日に1.1554まで下落後反発。再度ネックライン突破に挑戦している。15日スローストキャスティクスも売られ過ぎから反発しており、今週、ドルや株式が売られる展開が進行すると、これまで売られていたユーロに再度買いが入るだろう。

ただ、筆者はこの上げに懐疑的である。通常1度割り込んだネックラインを相場が再び上回ると、それまでの下げはダマシと見られるのだが、そもそもこの相場は1月3日の安値に起因するチャンネルラインが現在も有効な上値抵抗として機能しているのではないかと筆者は考えている。また、本格的に買い転換するには9月以降の主要高値を結んだ上値抵抗を少なくとも引け値ベースで連続して上回る必要があるだろう。更に23日及び69日移動平均も上回る必要がある。ここまで挙げた上値抵抗が軒並み1.1750付近に集中している。

更に先週7日の安値形成時、ストキャスティクスは強気オシレーターダイバージェンスを形成しなかった。従って、筆者は7日安値以降の反騰場面自体が大局的にダマシの上昇場面ではないかと考える。恐らく相場は今後長くて3～4週間、短くて今週中に1.1750付近を試し、そこから反落して1.1200付近を目指すのではないかと予測する。従ってこの水準に達したら10月高値以上の引け値にストップロスを入れて売り参入。ストップアウトしたら損切りドテン買いを推奨したい。

今週の主な予定・経済統計

11月13日(月)

- ・黒田日銀総裁、講演
- ・OPEC月報

11月14日(火)

- ・黒田日銀総裁、イエレンFRB議長、ドラギECB総裁、カーニー英中銀総裁、シカゴ連銀総裁 パネル討論会出席
- ・10月の米卸売物価指数 (前月比0.1%の上昇予想、前回は0.4%上昇)
- ・同コア指数 (前月比0.2%の上昇予想、前回は0.4%上昇)

11月15日(水)

- ・日本のGDP速報(第3四半期)
- ・10月の米消費者物価指数 (前月比0.1%の上昇予想、前回は0.5%上昇)
- ・同コア指数 (前月比0.2%の上昇予想、前回は0.1%上昇)
- ・10月の米小売売上高 (前月比0.1%の上昇予想、前回は1.6%上昇)
- ・11月のNY連銀製造業景況指数 (24.9の予想、前回は30.2)

11月16日(木)

- ・10月の米鉱工業生産指数、設備稼働率
- ・米週間新規失業保険申請件数 (前週は23.9万件)
- ・11月の米フィラデルフィア連銀景況指数 (前月は27.9)

11月17日(金)

- ・10月の米住宅着工件数 (118.8万件の予想、前月は112.7万件)
- ・ドラギECB総裁、講演



今週の相場風林語録

万人が心に迷う米ならば、連れなき道へ赴くがよし
相場は人気の裏に行く。人の行く裏に道あり花の山である。

今週の**九星★波動**

急落、急騰、要注意。

南雲 紫蘭

商売人と実直な田舎の政治家の会話一。

トランプ大統領と安倍首相の会見を見た率直な感想です。

実際トランプ大統領は、日本が北朝鮮のミサイルを上空で迎撃できるようになるとして、米国製の武器調達を増やすことを要請。結局貿易不均衡は正の一環として、対日圧力を掛けたのでしょ。

「F35は世界最高の戦闘機、さまざまなミサイルも製造している。米国に多くの雇用が生まれるし、日本が安全になる」。

それに対する安倍首相の回答は、「日本は防衛力を質的に、量的に拡充しなければならない」。F35Aや新型迎撃ミサイルのSM3ブロック2Aなどを米国から導入する上に、「イージス艦の量、質を拡充していく上で、米国からさらに購入していくことになるのだろう」。

これは事前に「日本が北朝鮮の弾道ミサイルを打ち落とさな

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (420)

中原 駿

上手いっていいのか、下手なのか、素晴らしい構図なのか全くわからない南宋の風景画を無理やり洋画にしたような不思議な絵をぼうっと上野がみていると、肩を軽く叩かれた。「これは少し面白い絵でしょう？」

柔らかな笑顔、セルロイドフレームの眼鏡、しかし奥の目は笑っていない。

日に焼けた顔、白髪が混じる短い髪。

髭にも白が混じっているが、白い歯が妙に印象的で、小柄ながらもしっかりした体躯は、シンガポールのにわか金持ちが全てたしなむゴルフを相当やっている様だった。

ダークネイビーのやや太めのストライプスーツは、肩のフィット感からも相当の値段を掛けた仕立てだろう。

第六感の **ボトムに向け下落過程**

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

サブサイクルボトムでの買い場探し

ドル円相場は6日114.72の高値を付けた後、9日には113.08まで下落して28日MAにタッチした。先週は「どうもサブサイクルボトムとしては中途半端。煮え切らない下げ方だ。9月8日107円台から始まった7～11週のサブサイクルは今週は9週目。ボトムの時間帯に入っているがまだ際立った下げが到来していない。日足ベースで見れば10月31日の112円台の安値がボトムになりえるが、はつきりしない。少なくとも28日移動平均（以下MA）を下回る程度の下げを見たい処」。

ボトムの時間帯で最低の条件はクリアしたが、目立った下げではない。今週はサブサイクルの10週目。今後2週以内でボトムを探す場面には変わりはない。ピンポイントで探し当てるのは難しい。順張りでは次の高値更新が新サイクル入りを伝えよう。同時に3ポイント上値抵抗突破もボトム打ちを確認する。現在はボトム模索に入っている。

ストラテジーはロングの一部を利食いし、残りは維持した状態。これまで28日MAを引け値で下回った場合に手仕舞いすとしたトレーリングストップを設定して上値を追いかけようとしたが、サブサイクルボトムの時間帯が近づいているので、下げの際は買い場になる。従って、ロングの一部を利食いした投資家は買い直す、あるいは買い増しを狙うところになる

いは不思議だ、武士の国なのに」などとツイートしたことは、この商売のためだったのか、とすら思えます。

現在の法律では日本は自国の領域に落下してくる恐れのある弾道ミサイルや、同盟国の米国など親密な他国に向かって飛ぶミサイルに限って迎撃することができるのです。

九星波動は、月盤が《九紫火星》から《八白土星》に入っています。これは「後半急あり」という星、

前半が上昇ならば後半調整、前半が調整ならば後半は上昇、という星です。

急落、急騰には、要注意です。

11月13日	11月14日	11月15日	11月16日	11月17日
月(二黒土星)	火(一白水星)	水(九紫火星)	木(八白土星)	金(七赤金星)
弱保合	陰極	寄付に戻る	後場急変	存外上がる

あるいは、ロンドンのサヴィ・ローのものかもしれない。

靴は茶色のウインチップ。

さすがにこれはオーダーではないか。

いや、自分が靴を仕立てたことがないだけで、これもハンドメイドかもしれない。すべてに金がかかっているな、というのが第一印象だ。

「ここはどうでしょう。少しお金をかけすぎたかもしれませんが、わかりやすい調度品よりも絵画やちょっとした小物に贅沢をしているのです」。

そうなのかー。

つまりこのわかりやすいような、うまいのか下手なのか全くわからない霧のような絵が相当のものということだ。

「リビングセットなどにお金をかけるより、絵のほうが資産価値が下がりにません」。

ワン・メン・メンの言うことは理解できる気がした。

う。また中期見通しでは先々週の方針を引き継ぐ。「1年サイクルが9月8日にボトムを付けているとすれば、上昇はまだ継続され、来年3月までは少なくとも天井は付けないだろう。ここで昨年同様、年末年始元の木阿弥パターンが出現する可能性が出てきた。…12月中に118円前後で高値を付けることも考えられる。次のサブサイクルのボトムは今年最後の買い場になり、12月には年初来高値更新を狙いたい」。一部利食いした投資家は今週は112円台があれば買い直す。ストップは110.80以下の引け値に設定。もし28日MAを引き値で下回った場合、順張りで買うとすれば次の28MA上抜けを狙っても良い。そして3ポイント上値抵抗を上抜けばさらに買い増し。12月中に最低でも117円以上を狙いたい。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第65回】ユーロ／ドル相場のサイクルについて（6）

1つのサイクルは、通常は2つないし3つのサブサイクルで構成されます。2000年10月26日の0.823から始まったユーロ／ドル相場の長期16.5年サイクルは、そこから16年3か月後の本年1月3日の1.0341でボトムをつけました。

このサイクルは単純計算で8.25年（99カ月）サイクル2つか、5.5年（66カ月）サイクル3つに分類され、前者は4.125年（49.5カ月）サイクル2つか、2.75年（33カ月）サイクル3つ、後者は2.75年サイクル2つか1.83年（22カ月）サイクル3つに分類されると仮定する事が出来ます。

結論から先に言うと、前16.5年サイクルは2位相パターンと3位相パターンが混在する「コンビネーションパターン」であった公算が高いと思われます。2000年10月安値を起点に、この相場はから8年（96カ月）目の2008年10月で安値をつけ反発。そこから99カ月目が今年の1月でした。しかしこの相場は66カ月サイクルで3分割も出来るのです。「相場サイクルの基本」には6分の1ルールが存在。特定の日柄は、その前後に全体の6分の1の日柄がオーブ（許容範囲）として存在します。

66カ月の6分の1は11カ月。これを踏まえ月足をカウントすると第一位相の日柄は61カ月、第二位相の日柄は55カ月と、オーブの条件をクリアしています。サイクルが3分割される場合、往々にして第一位相と第二位相の日柄は崩れません。

しかし2010年6月の安値を起点とした第三位相は79カ月目でボトムをつけます。長期サイクルの最終局面で内包するサブサイクルは日柄が歪みます。これは延長したケースでした。

そして現行相場は1月から新16.5年サイクル入り。しかもまだ起点から10カ月目。サブサイクルが2分割でも3分割でも第一位相です。1月安値を割り込まない限り基調は強気です。



ただ断言は出来ない。今週は金星トランスレーションがある。これは米国時間12月2日（日本時間3日）に発生する太陽・海王星ラインと関係。金星は13日に木星とコンジャンクション（0度）、16日（日本時間17日）に海王星とラインの関係になる。実はこのトランスレーションは前週まで金星ではなく太陽で出現。10月26日（日本時間27日）に太陽は木星とコンジャンクションを形成し、11月3日に海王星とラインを形成していたのだ。上記の期間中株式市場は上昇していた。

トランスレーションは予告編としての機能がある。ただ12月のラインは、ここを皮切りに来年5月、8月と3回繰り返される天体位相。まだ実際の天体位相が形成されていないので、前週までの上昇相場が今週も繰り返されるのか否か未知数だ。

ただ、現時点で星回りから言える事は株式の上昇余地は今週までという事だろう。週初から下落した場合、今週どこかで反発したとしてもダブルトップ型の線形になるのではないかと。逆に今週も上昇基調が続いても、今週末から来週頭にかけては売り場になると思われる。今週は急反転に注意したい週である。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

2つのトランスレーション

先週次の通り述べた“以前も指摘したが、長期相場サイクルの節目との相関性の高い木星以遠の外惑星（木星、土星、天王星、海王星）間のメジャーアスペクト（0度、90度、120度、180度）は、ここから来年の8月まで4回しかなく、その4回全てがライン（120度）である。ラインは惑星間に調和と安定をもたらす角度から、相場はこの時間に向けて上昇する傾向があり、転じて相場自体のピークとも関連性が高い。…星回りの重要度を考えると、来週末11月11日に発生する土星・天王星ラインの方が高いのではないだろうか。長期相場サイクルの天井形成場面として、この時間帯を視野に置いておく必要があるかも知れない。先週、NYダウが高値を更新したのが11月7日、S&P500と日経平均株価が高値を更新したのが9日。いずれも11日の土星・天王星ラインであった。従って、株式市場は軒並み先週の高値で節目となる高値をつけたかも知れない。

高く仕入れて安値で投げる投資家から
脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持ち続けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

〜バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則〜

S・アダチ&カンパニー

代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円（税込み）

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 11月13日（月） 今週はトレンド転換の週
- 11月14日（火） 保合いは転換前のエネルギー蓄積
- 11月15日（水） 高値、あるいは安値から11.8%の初動に注意
- 11月16日（木） テレンドが反転したか否かは後から判る
- 11月17日（金） ダメ押しに注意
- 11月18日（土） 昨今の市場ではシングルボトムや
トップの出現が減少傾向
- 11月19日（日） 保合い放れがダマシになるケースも多い

『フォーキャスト 2018』ただいま予約受付中！！
<https://www.toushinippou.co.jp/>